デザイナーのための経済コラム（25）

100年ライフ、長寿社会の到来に備えて

ドラマで織田信長が本能寺で自害する時に謡ったとされる謡曲「敦盛」には
・・・・・人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり一度生を享け、
滅せぬもののあるべきか・・・・・という場面があります。この謡曲の作者は不明です。
信長が自害した1582年にはこの謡曲が存在していたということであり、戦国時代の
平均寿命が一般に50歳くらいに認識されていたのかと思います。この時信長は満48歳でした。
平家物語（作者不祥）、太平記（作者不祥）が書かれた後のことだと思います。

https://ja.wikipedia.org/wiki/敦盛（幸若舞）

https://ja.wikipedia.org/wiki/平家物語　https://ja.wikipedia.org/wiki/太平記

奈良時代の律令には「およそ官人、70歳をもって致仕え（退職）を許す」とあったそうです。
奈良時代の平均寿命がどれくらいであったか不明ですが、この資料からは70歳まで十分に
活動出来た人がそこそこの割合でいたと推測出来ます。山上憶良は73歳まで生きたと
推定されます。律令の中に課税対象となる年齢を3段階に分けていて、高齢生産者として、
61歳から65歳までを対象者としていたようです。ということは、65歳というのは現代的にいえば、
生産年齢に入れられていたということであり、現代とは大きな違いがないように思えます。

老齢化をテーマにした文学は、日本では万葉集にはじまり、現代文学にも脈々と続いています。
また、他の芸術分野の世界にもあります。生老病死は世界共通の大きなテーマなのかと思います。
文学におけると高齢化のテーマを研究している人もいます。

江戸時代、徳川幕府では、文書として定年を定めていなかったようです。「御年寄」という
役職は大奥の女中の責任ある人につけられていた役職で、特に年齢を定めたものでは
ないようです。現代的にいえば、女性の高級管理職ということでしょう。時代劇にでてくる
武家の「隠居」は定年というよりも、上位者の恣意的な、半強制的な退職であったようです。

定年（停年）という用語が出てきたのは、明治政府が出来てからであり、対象は政府の
役人、軍人、公立学校教師であり、恩給支給の資格基準にされてきました。職種によって
異なり、ほぼ定年がないような役職もあったようです。恩給を貰うことを潔しとしない人たち
もいたようです。残念ながら、現代ではその反対に、年金を貰うために役職に執着している
のかと思われる人も見られます。　https://ja.wikipedia.org/wiki/定年

OECDでは新報告書「生涯を通じたより良い働き方に向けて：日本(Working Better with Age: Japan)」
を出して、日本の定年制度を改善することを勧告しています。欧米の労働観と日本の労働観には
違いがあります。カトリックの考え方は労働は「原罪origial sin」です。プロテスタントの労働の
考え方は「使命calling」です。中国・韓国の儒教の労働観は「肉体労働は卑、頭脳労働は貴」でした。
儒教の影響を受けた日本は、神道の自然観、仏教の「老若男女・貴賤を問わない平等観」も
加えられ、「労働倫理・職業倫理」が戦乱のない江戸時代に形成されて「近江商人の三方よし」として
全国に普及したもと思われます。

アメリカの経済指標として農業を除く雇用指数の変動が経済ﾆｭｰｽの話題になっています。
そもそも、アメリカでは定年という概念が無いようです。それは、雇用契約の条件に年齢や
性別、人種を取り決めることは差別として禁止されていることによります。
解雇・退職の双方の自由（Employment at will)が前提になっていることが雇用の流動性に
なっていと思います。

NHK大河ドラマ「青天を衝け」の中で渋沢栄一の晩年の場面に養育院の院長を務める
場面がありました。この施設は現在地方独立行政法人東京都健康長寿医療センターと
なっています。この施設は総合的な社会福祉施設で30年前は東京都老人総合研究所を
併設していました。ここでは老化現象を総合的に研究しています。先に挙げた文学から
の老化も研究しています。ここに生活環境研究室があり、私は仕事として何回か訪問して、
住宅のバリアフリーについて教えて頂きました。今は、バリアフリーからノーマライゼーション
へとコンセプトが変容（パラダイム・シフト）しています。

私が就職した昭和40年の定年は55歳でした。その後、満60歳が定年退職になりました。
2013年に高年齢者雇用安定法が改正されて、定年が先送りされるようになりました。
いま、定年という概念を大きく変えなければならないようになってきたと思っています。
65歳が定年となる一方で、早期退職という制度もできています。

数年前、金融庁が老後の生活費として一人あたり2000万円必要になると発表して物議を
起しました。これは、これまでの年金制度では対応できないことであり、その背景にあるのが
長寿化と、労働人口の減少です。また、最近、生命保険の掛け金が安くなったり、加入限度
年齢が伸びたのも、背景には長寿化があります。長寿化の影響は、高齢者だけの問題でなく、
全世代の問題・課題と考えます。

日本は長寿化では世界のトップにあります。日本が長寿のトップになった背景、理由として考えられるのは、次のようなことです。

1. 医療の発達、健康保険制度、教育の普及によって幼児の死亡率が大幅に低下したこと。
2. 経済力の向上によって労働環境、生活環境、栄養状況が向上したこと。
3. 栄養状況の中には、和食の栄養バランス、発酵和食食品があること。
4. 1945年以降、戦乱、暴動、革命、おおきな社会不安がないこと。

これから長寿化を阻むもの、こと、があるとすれば、次のことが考えられます。

1. 健康保険制度が崩壊して、医療の恩恵を受けられなくなること。
2. 経済力の低下、貧富差拡大によって、労働環境、生活環境、栄養状況が悪化すること。
3. 生活習慣病、栄養バランスの喪失、水質汚染、空気汚染が蔓延すること。
4. 国際紛争による侵略被害、戦闘、戦災、大自然災害、社会治安の悪化。
5. 世代間の役割調整ができないで、世代間で対立が生まれること。

長寿化に備えて何をすればいいのか（対応）を、考えてみました。

1. 少子高齢化というより、少子長寿化という**認識**に変えないと、対応が間違う。
   人口減少により生産人口も減少、出産率を政策で高めることが困難。

2. 生産人口の現象は、生産年齢の延長と生産性向上で対応することが求められる。
   生産性を高めるには雇用形態の**柔軟性**、多様化、流動化、高技能化が求められる。
   そのための継続的技能習得が必要になる。

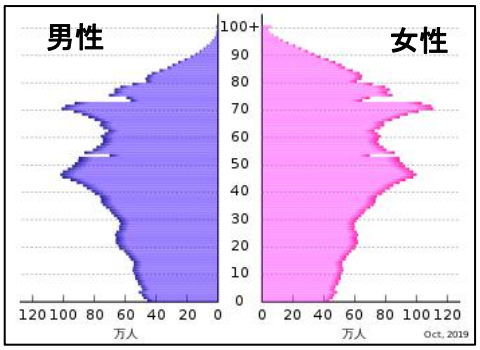
3. 長寿化は年金支給開始を遅くするか、支給金額を減額することになる。
   長寿化は生活費・医療費も長寿化する分だけ増えることを**予測**しなければならない。

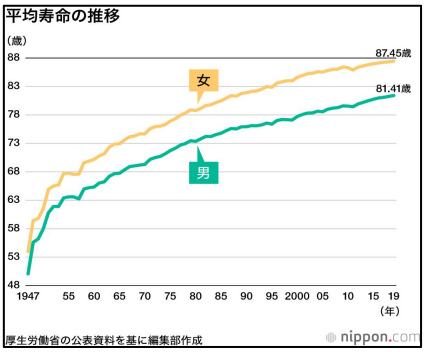
4. 長寿化社会の労働市場は必然的に変わります。（具体的な全体像は見えませんが。）
   従来の現役世代（生産年齢世代）と住み分けられる高齢者世代（後期生産年齢世代）が顕在化する。
   「シルバー人材派遣制度」、「社会福祉協議会」はその事例。
   かって、人間関係が濃密な地縁社会・農村では60歳になると「隠居組」に入った。
   村の祭りの執行役であり、村の大事の決定役でもあった。なかには村民の誕生などを
   記録する役、村の出来事を記録し続ける書記役など、それぞれ大役が与えられ、
   これは死亡まで続いた。
   組織も、個人も持続・存続するために社会の構造的変化に**順応**していくこと。

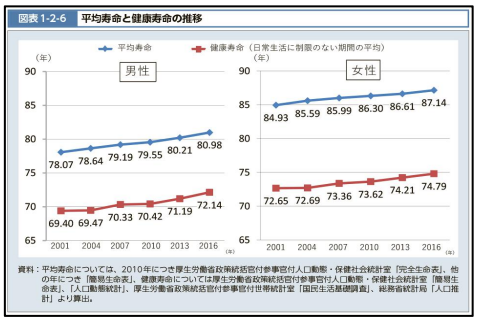
5. パンデミック、地政学的危機（国際紛争）、経済恐慌、自然大災害の危機とは
   いつも隣り合わせ。動物的な**勘**と冷徹な**論理**を個人単位で研ぎ澄ますこと。

6. 高齢化、長寿化にはネガティブな部分として認知症、老害があります。本人も周囲の人にも
   これにどのように対応するかが避けて通れない課題です。

「叱るなこども、いつかいた道、笑うな年寄り、いつか行く道、来た道 行く道 二人旅、
 これから通る今日の道、通り直しのできぬ道」
老若男女が対立ではなく互助、共存、共生することが、きわめて当たり前の社会と思います。
また、同様に経済格差が拡大していく中で、貧富が共存、共栄する社会が当たり前なのだと思います。







https://ja.wikipedia.org/wiki/定年
（OECD各国の定年が出ています。）

https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/backdata/01-01-02-06.html

（T. K. ）